

# 幼稚園における地域子育て支援活動の研究

—兵庫教育大学附属幼稚園における園庭開放の意味—

名須川 知子

(兵庫教育大学)

岸 本 美保子 小 林 みどり

(兵庫教育大学附属幼稚園)

現在、子育て支援の一貫として幼稚園の地域での役割が求められている。兵庫教育大学附属幼稚園でも子育て支援に関する「親育てプログラム」のひとつとして、幼稚園の園庭開放（平成18年より「子育てひろば」）を実施している。本研究では、幼稚園の地域開放を通して在園児やその保護者だけではなく、地域の子育て中の養育者に対する園庭開放の意味について考察した。その結果、在園児、その保護者、未就園児とその保護者に対する効果がみられ、子育て支援としての意義が明確となった。今後、保育のなかでつながりをもてる園庭開放の工夫や、さらなる地域への支援を広げていく必要と方向性の示唆が得られた。

キーワード：子育て支援、園庭開放、地域

名須川知子：兵庫教育大学大学院・基礎教育学系・教授，兵庫教育大学附属幼稚園長，〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1,

E-mail : nasukawa@hyogo-u.ac.jp

岸本美保子：兵庫教育大学附属幼稚園・副園長，〒673-1421 兵庫県加東市山国2013-4, E-mail:mikisimo@hyogo-u.ac.jp

小林みどり：兵庫教育大学附属幼稚園・教諭，〒673-1421 兵庫県加東市山国2013-4, E-mail:midoriko@hyogo-u.ac.jp

## A Research on Supports of Child Rearing in the Community : The Meaning of Open Kindergarten in Hyogo University Kindergarten

Tomoko Nasukawa

(Hyogo University of Teacher Education)

Mihoko Kishimoto and Midori Kobayashi

(Kindergarten of Hyogo University of Teacher Education)

Today, it is requested of function in kindergarten on supports of Child Rearing in community.

We produce the "Kosodate hiroba" that means opening of kindergarten. The children play on the ground of this kindergarten with very young children and their mothers. This research has the object of effect of society of children's mothers and very young children's mothers through play on kindergarten. So that, the idea of open kindergarten and the necessity to spread for more area and the suggestion of the aim could get a connection in the child care.

Key Word: Supports of Child Rearing, Open kindergarten, Community

Tomoko Nasukawa: Professor, Childhood Education, HyogoUniversity of TeacherEducation, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494 Japan, E-mail: nasukawa@hyogo-u.ac.jp

Mihoko Kishimoto: Vice President, Kindergarten of HyogoUniversity of Teacher Education, 2013-4 Yamakuni, Kato-city, Hyogo 673-1421 Japan, E-mail : mikisimo@hyogo-u.ac.jp

Midori Kobayashi: Teacher of Kindergarten of HyogoUniversity of Teacher Education, 2013-4 Yamakuni, Kato-city, Hyogo 673-1421 Japan, E-mail : midoriko@hyogo-u.ac.jp

## はじめに

現在、幼稚園は就学前の保育・教育機関として、未就園児をもつ地域の保護者のニーズに応える幼児教育のセンターとしての子育て支援機能や「親と子の育ちの場」としての役割や機能を一層発揮できるよう、幼稚園運営の弾力化が求められている。

本附属幼稚園においても、平成18年度から文部科学省の研究開発指定校として「親育てプログラム」の研究をとおして、保護者自身が子育ての力を高め、子育てに喜びや楽しみを見出したり、幼児理解や保育理解を深めたり、自分自身のあり方を考えたりする姿を目指している。昨年度の実施の結果では、課題として保護者同士のコミュニケーション等を円滑に進めることが出来る、お互い子育てをする者としての協力する力が欠如していることが明確となった(1)。園庭開放は、平成17年度から実施しているものである。現在まで実施している「園庭開放」とは、夏休み、冬休みを除く5月から2月まで、原則として月2回、第1、3火曜日の午前中、園庭を開放し、在園児の遊びと一緒に活動する内容である。今回報告する18年度は全17回の実施となった。活動内容は、第1火曜日は園庭開放とその後のお話等を主に在園児保護者が中心になって実施してもらった。第3火曜日は幼稚園教員と保護者が相談して、テーマのある遊びとして季節にふさわしい遊びを提供した。

園庭開放は、保育時間中に実施するため、担任・副担任に加え、保護者の自主的な保育参加を依頼した。その活動は、保護者の保育参加である「きっずくらぶ」の一部として実施されている。この園庭開放のスタッフについては、固定化を避けるため、毎回募集し、できるだけ保護者の自発性を優先するように心がけた。また、スタッフ保護者との実施前と実施後の話し合いを必ずもち、当日の打ち合わせや準備の他、実施の目的や実施後の課題についての共有につとめた。これは、在園児保護者への目的として第1に保育にスタッフとしてかかわってもらい、わが子だけではなく他の在園児の様子や、園児以外の子どもにもかかわってもらうこと、第2に教材については幼稚園教員と共に開発し、子どもとかわることで保育の楽しさを知ってもらうこと、第3に幼稚園の周辺の地域に在住する親子との交流をもってもらうきっかけとなることである。

本研究では、園庭開放を開始2年目の平成18年度の実施について報告し、以下の4者にとっての意味を考察する。すなわち、1. 「きっずくらぶ」参加保護者、2. 未就園の保護者、3. 在園児、4. 教師、である。

実施日、内容、参加人数等は表1のとおりである。年度最終には、143名の未就園児の登録数となった。

<表1> 平成18年度 園庭開放の実施状況

実施日(時間) (9時半から10時半)	活動内容 ( )内は園庭での実施	在園児保護者(人)	未就園親子(人)
5月2日	園庭で遊ぶ・絵本の読み聞かせ	3	14
5月16日	園庭で遊ぶ(スタンプラリー)	17	18
6月6日	園庭で遊ぶ・紙芝居	3	25
6月20日	園庭で遊ぶ(砂場遊び)	12	23
7月4日	園庭で遊ぶ・紙芝居	5	15
7月18日	園庭で遊ぶ(水遊び)	17	6
9月5日	園庭で遊ぶ・お話「ぐりとぐら」	8	23
9月19日	園庭で遊ぶ(運動遊び)	16	42
10月3日	園庭で遊ぶ・お話「お月様」	14	58
10月17日	園庭で遊ぶ(手作り楽器遊び)	28	50
11月7日	園庭で遊ぶ・お話「おおきなおいも」	14	43
11月21日	園庭で遊ぶ・スタンプ遊び	21	33
12月5日	園庭で遊ぶ・お話「ぼかぼかホテル」	8	12
12月19日	園庭で遊ぶ・クリスマス飾り作り	12	25
1月16日	園庭で遊ぶ・お正月遊び	15	22
2月6日	園庭で遊ぶ・小学生と一緒に遊ぶ	4	50
2月20日	園庭で遊ぶ・ひな飾り作り	27	39

## 結果と考察

園庭開放では、普段の在園児の子どもと教師の他、在園児の保護者、未就園児親子（含む在園児の弟妹）といった普段とは異なる人たちが園内で同時に存在することになる。「きっずくらぶ」として親育てプログラムの観点からの目的は、保育に参加しながら、普段の子どもの遊びの様子を見たり、実感することで、子どもに対する気づきや再発見をし、そのことでより子ども理解が深まることである。また、同時に在園児の子どもにとっては、3歳児以下の乳幼児とかかわる体験をすることが可能となる。そこで、未就園児とのかかわりをもつことで、「世話をする」という思いやりの気持ちをもてるようになることが目的である。さらに、大人とのかかわりでは、自分の、あるいは自分以外の母親とのかかわりといった様々な大人と出会う機会を提供している場でもある。

以上、多様な人々とかかわりの場でもある園庭開放の意味を4つの観点からまとめた。

### 1. 「きっずくらぶ」参加保護者にとっての意味について

「きっずくらぶ」として参加する保護者は、当日の前後に話し合いをもつ。当日の前には、内容の打ち合わせが中心であるが、当日後の話し合いでは、保護者の様々な感想や、活動内容や活動方法について気づいたことなどが語られる。これは、「親育てプログラム」の一環としての親の成長を促す「気づき」に焦点をあてたものである。以下に話し合いの内容をまとめたものを示す。なお、( )内は話し合いの月日と活動内容である。

- ①園児と遊んで、遊びのおもしろさや楽しさが分かる。
- ・「子どもたちと一緒にフープをしたら、翌日疲れが出た。楽しかった。(9/19 運動遊び)」
  - ・完成品ではなく、思い思いのものでいいのだ、ということが分かった。それぞれに、こういう楽しみ方がある、でいい。穴があいているだけのスタンプで、子どもは面白がっていた(11/21 スタンプ遊び)」
  - ・「家では、なかなかできないことをさせてもらっている(10/17 楽器遊び)」
  - ・「子どもが音を楽しんでいる様子、楽器を作るのを楽しんでいる様子を見て、うれしくなった(10/17 楽器遊び)」
  - ・「簡単な手作りの凧を、子どもたちは十分楽しんでいた。簡単なものでも、十分楽しめるということが分かった(1/16 お正月遊び)」
- ②子どものよさが分かる。
- ・「フープをしている園児が、リレーをしているところに未就園児が行かないようにかまっている姿をみ

た(9/19 運動遊び)」

- ・「太鼓に新聞紙を張るとき、子どもが手で押さえていてくれた。ただそれだけでうれしかった(10/17 楽器遊び)」
  - ・「わが子は4歳女兒。負けたくない、という気持ちが強い時期。家では負けると泣き叫んだりするが、幼稚園では姿が違う。カルタとりは、とてもシビアな感じで、びりびりした雰囲気です勝負していた(1/16 お正月遊び)」
  - ・「カルタとりに3歳児も参加していた。見ていた4歳児が、3歳児にヒントを言ったり、励ましたりしていた(1/16 お正月遊び)」
- ③自分の子育てを振り返る。
- ・「子どもと遊びながら、自分自身が楽しんだ。子どもと、とことん真剣に遊ぶことがこれまでなかった(6/20 砂遊び)」
  - ・「他の母親たちも、自分もドロドロになって遊んで、いい体験になった。わが子と遊ぶときにそれができたらいいと思う(6/20 砂遊び)」
  - ・「わが子が5歳児なので、今という時はもうない、と思って、当日になって参加させてもらった。3歳児を見て、わが子もこんなときがあった…と思う(1/16 お正月遊び)」
- ④他の保護者とかかわりから、保護者同士のつながりのよさを感じる。
- ・「3歳児保護者は一人だけの参加だった。他のお母さんたちのパワフルさに引き込まれた(6/20 砂遊び)」
  - ・「下の子どもを連れて参加したが、他の保護者が見ていてくれた。(9/19 運動遊び)」
  - ・「演奏会をして、特技がある人がたくさんいることが分かった。(10/17 楽器遊び)」
  - ・「『自分で作り始めるまで、待ったら?』という保護者同士のアドバイスがあった。なるほど、と思った(11/21 スタンプ遊び)」

以上のことから次の3点のことが明らかになった。第1に、これらの話し合いでの気づきから子どもへの再発見が見いだせる。これは、実際に園庭で活動している姿を見て、自分も体験して気づいていっている様子が伺われる。第2に、「きっずくらぶ」の回数を重ねるごとに、保育のスキルを高めている様子を見ることができた。たとえば、わが子以外の子どもにも援助できていく姿や、声かけや見守り、認める姿も回数を経るに従ってスムーズに自然体でできる保護者の姿を見ることができた。これは、毎月の活動の積み重ねによるものであろう。第3

に、活動をとおして保護者同士が声をかけあうようになり、保護者同士の関係、つながりができていく場となっていく様子がみられた。お互いに気軽に子育ての悩みを共有できる前段階として共にひとつの活動をやっているという「活動」がまず必要であろう。

これらのことから、仕事における役割を持ちながらかわっていくためにも、この園庭開放の際の保育スタッフ制は効果があったと思われる。課題としては、参加スタッフが毎回同じになり、グループ化、固定化しないように、出来るだけ多くの保護者に関わってもらえるように工夫するというのである。

そのためには、参加者を新たに呼びかけたり、月1回は、クラス担任と保護者で担当することも検討する必要がある。これをうけて、クラス担当については19年度から実施している。



お母さんも一緒にリレー（9月）



ひな飾り作り（2月）

## 2. 地域の参加者にとっての意味について

地域の保護者にとって園庭開放がどのような意味があったのか、参加者にアンケートを実施した。実施時期は2月の園庭開放時で20名の回収であった。2月の園庭開放参加

者は平均22名であったことから、回収数が少なくなった。

活動については、第1火曜日11月に実施した楽器遊びと体験劇がもっともよかったこととして20名中9名が明記している。また、第3火曜日は、10月の手作りでの楽器遊びが8名であった。この事業は、10月の楽器作りから11月へ活動の連続があるように実施したことも結果的に印象に残るものとなったようである。

また、自由記述欄の意見としては以下のようなものがあった。

- ①在園児である幼児とのかかわりがあってよかった。
  - ・「普段は年の違う子と遊ぶ機会が少ないので、園庭開放で異年齢と遊べてよかった。（2歳4ヶ月）（2歳3ヶ月）」
  - ・「他の幼児がいると、取ったり取られたりする経験ができてよかった。（1歳4ヶ月）」
  - ・「同年齢児と一緒に遊べ、また、在園児を見習っていろいろな遊びの中でのルールも学べてよかった。（3歳7ヶ月）」
  - ・「在園児と接し、楽しそうだった。（3歳8ヶ月）」
  - ・「在園児の子どもたちが親切に相手してくれるので、とても嬉しいです。（2歳3ヶ月）」
- ②経験の広がりがあった。
  - ・「家ではできないようなことが体験できてとても楽しそうだった。（3歳）」
  - ・「お話や歌をきいて、楽しそうだった。スタンプ遊びの紙を家で見て喜んでいる。（1歳7ヶ月）」
  - ・「園庭でのびのびと、自由に遊べて満足そうだった。（1歳10ヶ月）（1歳4か月）（2歳4か月）」
- ③自分自身を振り返ることができた。
  - ・「準備してくださる保護者の熱意に力づけられる。（1歳4ヶ月）」
  - ・「楽しそうな様子が見られたり、工夫されているヒントがもらえたり、自分の子育てにとっても参考になった。（3歳5ヶ月）」
  - ・「新たな遊びの発見があった。（3歳5ヶ月）」
  - ・「家でこのままいいの悩む（3歳）」
  - ・「一人っ子なので集団生活になじんでくれるか心配である。（3歳8ヶ月）」
  - ・「来年入園を希望しているが、楽しそうな園の雰囲気園生活が楽しみである。（3歳8ヶ月）」
  - ・「在園児とのかかわりもでき、来年の入園もスムーズにできるのかなと思う。（3歳5ヶ月）」

以上、園庭開放に参加した地域の保護者は、午前中に在園児と共に活動することで子どもにとっても自分にとっ

でも有意義な時間を過ごしていることがわかる。また、来年以降の幼稚園入園も含めて、様々なことを気づき、見ていることもわかる。未就園のわが子が在園児とのかかわり、園で楽しそうに遊んでいる様子から来年の不安が安心にかわっているようである。しかし、保護者同士のかかわりはあまりなかったようである。

そこで、今後は、保護者同士の出会い、かかわりを意識して活動に積極的に取り入れて、実施する方向性を考えていく必要がある。地域におけるセンター的役割の観点から考えると、月に2回にわたり「オープン・キンダーガルテン」を実施しているようなものである。平成19年度からは兵庫県の子育て支援事業に登録し「まちの子育てひろば」の認定も受け、広報誌に掲載されている。今後、ホームページの充実も含め、さらに地域に周知できるようにしていきたいと考えている。



手作り楽器の製作（10月）



手作り楽器の製作（10月）

### 3. 在園児にとっての意味について

本来この活動の中で保育にとってもっとも大切なことは、在園児にとっての意味を明確にすることであろう。それは、幼稚園が教育課程以外の子育て支援を実施する

としても、まず教育課程を充実すること、あるいは教育課程に反映する活動であることが必須になるからである。「親育てプログラム」も、幼児の育ちのためになされることは、忘れてはならないことである。そこで、幼児にとって、保育にとってこの「園庭開放」の実施がどのような意味をもっているのか考察する。

#### ①保育と継続し、刺激を受ける

第3火曜日の園庭開放では、テーマのある遊びを実施している。これは、日々の保育の延長線上の活動として、保育に関連した内容を考えて実施している。たとえば、10月の運動会を考えると、9月の運動遊びの内容を取り入れたり、10月楽器遊びの活動の後には、それぞれの学年での楽器遊びにつながっていった。「運動遊び」では、教師や友達との遊びだけは、個々の幼児がじっくり遊びに取り組むことが難しいが、トランポリンや跳び箱などに保護者が丁寧にいかかわってくださるので、限られた時間内でたくさんの運動遊びを体験することができた。このことは、楽器遊びやスタンプ遊びなどでも同様である。楽器作りなどの製作では、「きっずくらぶ」の保護者が丁寧に作り方を教えてくれることで、遊びに必要なものを作る方法を知ることができる。このように、保護者と様々な遊びに取り組んだことがきっかけとなり、幼児が興味をもち、様々な遊びに取り組む満足感を味わっていることにつながっている。

#### ②多様な人々とのかかわりをもてる。

様々な人とのかかわりが希薄になってきている昨今において、自分の親以外の保護者に遊んでもらうことや、地域の未就園児やその母親と同じ場で遊ぶことは、多くの人とのかかわりがもてるという利点があると言えよう。この園庭開放では、未就園児とかかわる機会が多いため、未就園児に頼られて、年下の子に対して、やさしくかかわろうとする在園児の姿も多く見られた。また、幼児が日常の保育の中で教師とかかわることとは違った親近感をもって、自分の親や友達と一緒で活動する喜びを、共有している様子も見られた。

以上のことより、園庭開放の日は、日々の保育よりも多くの人とのかかわりという面や、思いやりの心が育つきっかけとなっている。そこでは、人とふれ合う楽しさや面白さを感じ取り、かかわろうとする力が身につくことが言えよう。しかし、それは、かなり偶発的なかかわりも多く、せっかくのチャンスが活かされていない事例も見られた。そこで、今後の課題として、在園児と未就園児がかかわる場面を意図的に設定することが必要である。そこで、平成19年度からは、クラス担当を決め、そこでは「きっずくらぶ」参加保護者だけでなく、在園児も一緒に遊戯室で活動をし、たとえば、最後は手

作りの折り紙等のプレゼントを在園児から未就園児にわたすというような活動をするように改善した。

#### 4. 教師にとっての意味

日々、保育を実施している教師にとって、この園庭開放はどのような意味をもっているのだろうか。各担任に記述式で答えたもらい、その後園内で話し合ったことを次にまとめる。

##### ①幼児の理解が深まる。

園庭開放の日は、普段の教師と幼児だけの関係では見ることのできない個々の幼児の人とかかわる姿を見ることができる。そこでの様々な子どもの姿から、その子どもの育ちを見ることにつながる。それは、参加の保護者や未就園児と幼児のかかわりの様子を見ることで、「幼児の日頃と違う一面を知り、さらなるその幼児への理解につながる。」ことでもあり、「保護者の幼児へのかかわりなどを観察することにより、保護者の変化を読み取り、保護者理解につながっている。」や「教師自身も未就園児とかかわることで、幼児理解になっている。」というように、様々な観点から幼児へのさらなる理解が得られていることがわかった。

##### ②保護者の気持ちを知り、共に育つこと。

まず、保護者に対する意見として、「親の自己発揮への手伝いをして、共に育つ、共に子どものためがんばろうとする気持ちになった。」という保護者からの励ましをもらったという意見や「保護者の子育てや保育に対する願いを知るきっかけになる。」や「保護者の視点にたって、保護者の悩みを考えることができるようになった。どんなことでも保護者の方の話を聞き、共感することの大切さを感じた。」というように、保護者と同じ活動を支援することで、親の立場の気持ちに共感できたことが述べられた。

教師と保護者の連携については、「親育てとは、教師も共に育つ『共育』であると考えている。」というように、実際には保護者との連携は難しいが、教師自身が保護者との連携の方法を考えることは、「今後の教師自身の保育力の向上になる。」という意見があった。

##### ③子育て支援の方法のヒントを得た。

今までは幼稚園での子育て支援が大切であることがわかって、「どのように行うことが本来の子育て支援につながるのか。」とか、「どのような方法で実施したらいいのか。」という疑問があった。しかし、今回の実践を経て、「保護者と共に保育の中で、無理なく効果のある方法のあり方へのヒントも得られるようになった。」という意見があった。

#### まとめと今後の課題

本園での園庭開放は、日常の幼児一教師だけではない、幼児自身の母（父）親である大人、未就園の乳幼児という「異人」が入り交じった空間である。その中で、様々なかかわりをもちながら、在園児にとっても刺激やかかわりがもて、当日参加の保護者、未就園児の親にとっては幼児のよさがわかり、子育て上のヒントを得た、自分自身を振り返る機会になっていることがわかった。さらに、教師にとっては、幼児へのさらなる理解と、保護者の気持ちへの共感が深まることにつながっていた。もちろん、附属幼稚園の教育を保護者や周囲の地域の人々に理解してもらう機会にもなっている。

これからの地域子育て支援活動については、従来のように在園児とその保護者を中核にして、まだ幼稚園に来ていない未就園児をも巻き込んだ子育て支援をしていくことを考えている。幼稚園は地域にあるものだが、その中で保護者の力を得て、協力して地域へ広がっていくことを目指している。幼稚園を「開く」ことは、幼稚園側の教師にとっては普段の保育以上の仕事として実質的な負担をもたらす。しかし、本来の幼児教育の意義を考え、在園児にとっての必要な活動であり、保護者にとっての成長を促すものとしての理念をもち、効果を実感する時、それは達成感と職責を高めることにつながる。また、グローバルな視点で幼児教育を捉えたと、地域にある幼稚園を基盤として周囲の人々の子育て力を少しでも高められ、これからの幼児教育に寄与することも望まれていることである。その方法は、各地域と幼稚園の実態に応じて工夫されるものである。本園における今後の具体的な改善点としては、ただ園庭を開放するだけでなく、参加者が自己紹介をする機会をもつ等のしっかりした出会いをつくり、活動を展開していきたい。また、多くの在園児の保護者の参加を促すために、19年度からはクラスで担当することをしているが、その方法は継続していきたい。さらに、毎週月曜日に実施している「子育て相談」にも気楽に参加できるようにしたい。現在では、園庭開放後に「園長先生の子育てワンポイント」の話をに入れて実施している。19年度は、従来の「園庭開放」の名称から「子育てひろば」と変更した。さらに、「ひろば」として地域の子育ての中核となれるよう、そこに集う人々にとっての意味を明確にし、それを踏まえた子育て支援の内容・方法を検討する必要がある。

#### 注：

- (1) 兵庫教育大学附属幼稚園『平成18年度研究開発実施報告書（第1年次）』平成19年3月

(2007.11.30 受稿, 2008.1.31 受理)